

小学生に英語の読み方を教えるには～長期的かつ繰り返し による、楽しいフォニックス活動の実践報告～

こどもとシニアの脳活英語教室 AtoZ Lab 井上 夏子

1. はじめに

音声中心で学んだ知識やスキルを文字学習へスムーズに移行できるようにするには、音声指導そのものを充実させる必要がある。近江（1996:52）は、リーディングの前提条件として「(1) 訳さずに理解すること」、「(2) 音声・身体感覚を働かせていること」、を挙げている。文字を読んだ時に、まるで自分自身がそれを発音しているかのように体の様々な感覚が反応し、英語を英語のまま理解できるようになることの重要性、並びに読む活動以前の音声指導の大切さを指摘している。

本稿では、小学生にどのように英語を教えるかについて、特に読みの指導の前提に焦点を当てた実践報告をする。主となる活動は、学習者が意欲的に楽しみながら練習できるような工夫を凝らした、発音指導及びフォニックス遊びである。

小学生が文字を「音のヒント」としてとらえ「音声・身体感覚を働かせて」知らない単語も果敢に発音しようとするようになるまでの指導の一過程を紹介したい。

2. クラスでの実践

2.1 対象者

対象者は秋田市の英語教室「こどもとシニアの脳活英語教室 AtoZ Lab」に通う児童たちである。本稿で扱う対象は2015年10月～18年4月の間に同スクールの初心者コースの受講を開始した小学校1～4年生である。ただし、それ以下の年齢（3歳～年長）の学習者にも同様の手法を用いて読みの指導をすることがおおむね可能である。

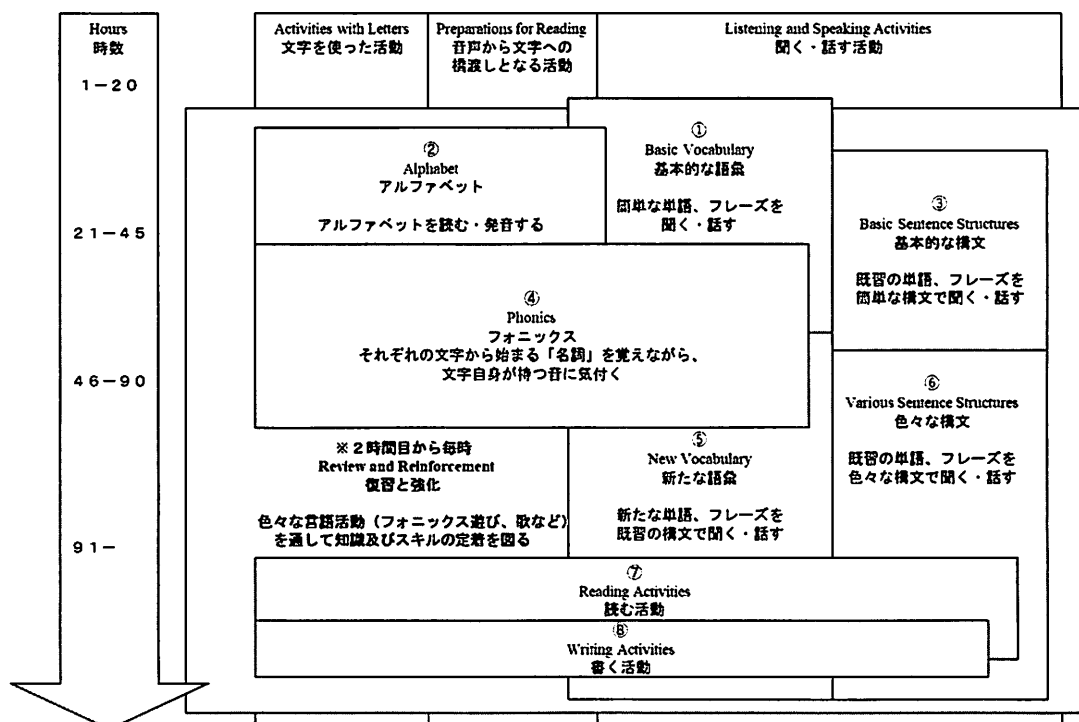
レッスンは、指導者1人に対し、5～8人の異学年からなるグループで、1コマ45分を週1回、年間45回行った。本稿ではそれらのグループレッスンのうち、1～90時間（コマ）前後の実践内容について述べている。すべての指示、説明、会話が英語のみでなされ、複雑なゲームのルール説明を要する時のみ、一部日本語のヒントを用いた。

2.2 指導順、言語材料、および使用教材

児童たちは「聞く・話す活動」を主としながら、「音声から文字への橋渡しとなる活動」及び「文字を使った活動」も行い、その後「読む活動」にも徐々に取り組んだ。そ

の指導順と大まかな内容を（表 1）に示す。①～⑧はそれぞれの活動を導入した順序である。また、復習と強化（Review and Reinforcement）の活動は 2 時間目より毎回行い、知識及びスキルの定着を図った。尚、時数は目安であり、クラスごとに進度は若干異なった。例えば④のフォニックスは②のアルファベットそれぞれの文字がしっかり認識でき、正しく発音できるようになってから行うが、速いクラスで 20 時間目から、遅いクラスで 25 時間目から開始した。

（表 1）：指導順と時数の目安



それぞれの活動で用いた言語材料、および使用教材は以下の通りである。

① Basic Vocabulary 基本的な語彙

言語材料：

単語：Animals, Numbers(1-20), Body Parts, Colors, Shapes, Verbs, Foods and Drinks, Countries, 季節行事（イースターやクリスマス）の単語など

フレーズ：Hello / Hi.

Good bye. / See you (later). / Take care.

Let's ~.

How are you? - I'm (good など).

Here you are. -Thank you. -You're welcome.

Which color do you want? – (Blue など) please!

How many ~?

使用教材：フラッシュカード、歌

② Alphabet アルファベット

言語材料：アルファベットの大文字と小文字

例：/ei/-A, a /bi/-B, b

使用教材：フラッシュカード、ポスター、歌

③ Basic Sentence Structures 基本的な構文

言語材料：What's this? -It's (an apple など).

Is this ~? – Yes, it is. / No, it isn't.

What can you do? - I can (play the piano など).

Can you ~? – Yes, I can. / No, I can't.

What do you like? – I like (spaghetti など).

Do you like ~? – Yes, I do. / No, I don't.

使用教材：歌、フラッシュカード

④ Phonics フォニックス

言語材料：Alphabet Sounds アルファベットの音と、それぞれの音から始まる4つの単語

例：Aa - /æ/ : ant, apple, alligator, ax

使用教材：Oxford Phonics World Level 1 Student Book with Multi ROM, (2012)

⑤ New Vocabulary 新たな語彙

言語材料：

単語：School Items, Family, Toys, Jobs, Nature, Adjectives, Personal Pronouns, Prepositions など

フレーズ：What's your name? – My name is ~.

(It's) nice to meet you. / (It's) nice to meet you, too.

Happy birthday.

How old are you? / I'm ~ years old.

How's the weather? / It's (sunny など).

What's wrong? / What's the matter? など

使用教材：フラッシュカード、歌

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Student Book with Audio CD, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Teacher Cards, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Student Book with Audio CD, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Teacher Cards, (2017)

⑥ Various Sentence Structures 色々な構文

言語材料：What are these/those? – They are ~s.

Are these ~? -Yes, they are. / No, they aren't.

Who's he/she? – He's/She's ~.

What do you have? – I have ~.

Do you have ~? – Yes, I do. / No, I don't.

What does he/she have? – He/She has ~.

Does he/she have ~? – Yes, he does. / No, she doesn't.

Look at me/him/her. など

使用教材：フラッシュカード、歌

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Student Book with Audio CD, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Teacher Cards, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Student Book with Audio CD, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Teacher Cards, (2017)

⑦ Reading Activities 読む活動

言語材料：CVC words (C: consonant<子音>と V: vowel<母音>から成る、意味のある単語 例：cat, bed, box など), sight words, 既習の単語・フレーズ・構文、新しい単語・フレーズ・構文

使用教材：フラッシュカード、歌詞

Oxford Phonics World Level 2 Student Book with Multi ROM, (2012)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Student Book with Audio CD, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Teacher Cards, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Student Book with Audio CD, (2017)

Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Teacher Cards, (2017)

⑧ Writing Activities 書く活動

言語材料：CVC words、既習の単語、構文

使用教材：Oxford Phonics World Level 2 Student Book with Multi ROM, (2012)

2.3 教え方及び言語活動の例

2.3.1 基本的な教え方

小学生に外国語としての英語を教える際に、考慮すべき重要な項目が3つある。第一に、「楽しい」という側面である。後述するが、見せかけではない本当の楽しさを生み出す工夫が求められる。

次に、「知識を授ける」側面と「スキルを鍛える」側面である。いわゆる「聞く・話す・読む・書く」の4技能のどれを主目的とした活動においても、指導者はこの2項目を絶えず確認し、学習者のそれぞれの到達度を意識的に評価しながら指導すべきである。

本実践では、この3項目のうちスキル面から子どもが得られる実感を「できる」、知識面から得られる実感を「わかる」とし、それに「楽しい」という実感が加わるよう考慮して取り組んだ。

2.3.2 「楽しい」活動

児童は、「〇〇ゲーム」と銘打った一見楽しそうな言語活動でも、それが本当に楽しいものかどうか、すぐに見破る。そして本当に楽しくない活動には決して本気で取り組まない。一方、児童自身が「楽しい」と感じ、目を輝かせて一生懸命取り組んだ時、その経験は知識やスキルを強化する。

本実践では「楽しい」活動及びレッスンを以下のように位置付けた。

① コミュニケーションの中で行われる

活動は指導者－児童、児童－児童の双方向のやり取りによって進んでいく。指導者が一方的に話し続ける、歌や映像を一方的に流す、などの活動はコミュニケーションに欠けている。一方、指導者の話を児童が能動的に聞き、体やことばで反応する、歌や映像から児童が特定の単語やフレーズを聞き取る、などのタスクを与えると、双方向のコミュニケーションが生まれる。

② 繰り返しである

1時間の中で何度も繰り返すこと、そしてそれを何時間かにわたって繰り返し行うこと、そして定期的に復習することが大切である。一度の説明で「わかる・できる」児童と、そうでない児童がいるためである。また、繰り返すことで発話や聞き取りのチャンスが何度も訪れる。そして忘れにくく、定着しやすくなる。これは後述する「わかる」「できる」という児童の実感を高め、自信を与える。また繰り返しによって予測を立てながら聞いたり考えたりすることも可能になる。

③ 少し緊張感がある

楽しい活動でも単調に繰り返すだけではやがて刺激的ではなくなり、児童は飽きたり活動する意欲を失ったりする。学習内容とは関係のないことで楽しみ出す児童も現れる。活動の内容、ルール、指示の出し方、指導者の話すスピードなどに変化を持たせ、少しだけ緊張感を与えると、児童は知らず知らずのうちに集中するようになる。またクラスをグループ分けしてポイントを競わせたり、聞く態度、友達との接し方など好ましい態度を全体の前で具体的にほめたりすることも有効である。

2.3.3 「できる」活動

1時間のレッスン内で、または一つの言語活動内で復習と強化が大部分を占めるようにする。新出の言語材料の導入をその時間のメインに据えるのではなく、強く印象付けるのみで終了し、それ以外の活動の多くを前時までの復習に充てる。復習の時間内で知識・スキルの定着を図るための「楽しい」活動を多く行う。

新出の言語材料を指導する際、導入後すぐに発音練習する。その際、十分な量の繰り返し練習を、反射的に滑らかに発音できるよう楽しく繰り返す。材料の導入順には特に配慮し、児童が聞き取りやすく、発音しやすいものから順に難易度を上げて提示する。ゲーム等を初めて行う際は、ゲームそのものを「新出」ととらえ、ルール説明などを明確に行う。扱う言語材料は全て、またはほとんどが既習のものになるようにし、同じゲームを次に行う際に、少しずつ新しい言語材料を増やしていく。

2.3.4 「わかる」活動

学習初期の段階で、名詞をたくさん教える。(本実践では、1年目で覚える約350語中、名詞は約200語)イラストや実物を見ただけで理解しやすく、日本語を介さずにとんどん語彙が増やせるためである。また、多くの名詞を学ぶ過程で、様々な音素に触れ、大量の発音練習が可能になる。これにより英語を話すための口の筋肉が鍛えられ、音の強弱、音声変化などに初期から慣れることができる。名詞の語彙が増えることにより、他の品詞や新たなフレーズが導入された際、学習者自身がすでに、理解を助けるヒントを多く有していることになる。前述の通り、新出語句は強く印象付けながら明確に導入することが非常に重要である。イラストや実物などの Visual Aids (視覚教材) や、ジェスチャー、表情、声色を駆使して総合的にアプローチする。

2.3.5 レッソンの組み立て方

前述のように、「楽しい」「できる」「わかる」活動を1コマに必ず盛り込む。ポイン

トは「少しの新出+たくさんの復習」である。ただし、単調にならないよう、テンポよく全体的に少しだけ緊張感を持たせる。学習者の声、リアクションにできるだけ応え、コミュニケーションを増やす。自然なコミュニケーションに必要であれば、その時間の言語材料以外の単語やフレーズも使ったり教えたりしてよい。

本実践では、仲田（1993）が提唱する MAT 式指導法を取り入れた。MAT とは、授業者がモデルを示し（Model）、児童はそれに習ってアクションしながら（Action）英語を話す（Talk）指導法である。児童は体を動かしながらリズムカルかつスピーディーに学習でき、英語が楽しく身に着けられる。

指導案の例を（表 2）に示す。本時は 36 時間目のレッスンである。活動名の枠内に、その活動が初めて導入されてからの「活動ごとの時数」を（第～時）で表している。時数が増えるごとに復習と強化の活動がより複雑なものになる。例えば「動詞及び can の練習」は初めて単語を導入してから第 16 時目にあたり、すべての学習者が動詞や can の文型を、自信を持って言える段階である。ここでの復習と強化の活動は、ランダムに割り当てられた動物の特徴を英語で表現し、それを言い当てるゲームである。既習の動物や色、数の単語を使い、can 以外の文型も使いながらコミュニケーションを楽しむことができる。

（表 2）：指導案例 36 時間目

時間 分	子どもが行う言語活動（♪=歌、☆=ゲーム）		
	活動名	導入	復習と強化
10	☆フォニックスカルタ (第7時)		<ul style="list-style-type: none"> ・A-J の音とそれぞれの単語を復習する ・読み上げられた単語のカード（イラスト）を取る ・取ったカードの単語を発音する ・取ったカードの枚数を英語で数える
2	♪Hello! あいさつ (第35時)		<ul style="list-style-type: none"> ・Hello を歌う ・友達や先生に How are you? と尋ねる ・How are you? に答える
3	♪The Pinocchio (第1時)	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい歌のビデオで歌詞と動きを確認する。慣れてきたら途中から一緒に歌ったり踊ったりしても良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の“What's this?” “Touch your-!” などにことばや動作で答えながら Body Parts の単語を復習する ・Body Parts の単語を聞き取る
10	動詞及び can の練習		<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれてフラッシュカードで指定された語を用い What can

	(第16時) ★Who Am I ゲーム		you do? -I can ~.のやり取りを行う (この形式で既習の動詞を復習する) ・一人ずつ、ある動物になりきり What can you do?に答える ・友達の答えを聞き取って何の動物か当てる 例 全員 : What can you do? alligator のカードを持っている子ども: I can swim and walk. 生徒 1 : Are you a duck? alligator のカードを持っている子ども: No, I'm not. I'm green!
3	♪Yes, I Can (第1時)	・新しい歌の中に何種類の動物が出てくるか聞き取る	・動物の単語を聞き取る
10	食べ物の単語 及び like の練習 (第3時)		・イラストの一部を見て何の食べ物か答える (この形式で既習のすべての食べ物を復習する) ・I like ~. の練習後、友達や先生に What do you like?と尋ねる ・What do you like? に答える
5	フォニックス (第14時)	・li - /i/ : insect, ink, igloo, iguana 新しいカルタのイラストを見ながらそれぞれの単語の発音を練習する ・教科書とビデオでさらに発音練習する	
2	♪See You Later あいさつ (第36時)		・See You Later を歌う ・友達や先生に See you later. Take care.などとあいさつする

使用教材 : *Super Simple Songs 1~3 CD*, (Super Simple Learning)

Super Simple Songs Animals CD, (Super Simple Learning)

Oxford Phonics World Level 1 Student Book with Multi ROM, (2012)

2.3.6 言語活動の例

① フォニックスカルタ

事前に、アルファベットそれぞれの音と、その音から始まる4つの単語(名詞)を十分に練習しておく。(例 : Aa - /æ/ : ant, apple, alligator, ax) カードの表にはその単語のイラストが、裏にはスペルではなく最初の文字(大文字と小文字)が書かれてある。(本実践では *Oxford Phonics World Level 1 Student Book with Multi ROM* の付録カードを用いたが、同様のものを自作して行うことも可能である。)

学習者が自信をもって発音できる単語が増えてきたら、それらのカードのイラスト面を使ってカルタをする。3~8人程度のグループに分かれ、読み上げられた単語のカードに素早くタッチする。その際、その単語を正しく発音出来たら取れる、というルールを設ける。学習が進み、カードが増えてきたら次のようなル

ールを追加する。

- ・単語が読み上げられる際、児童が手を置く位置を英語で指示する。

指示の例：“Put your hands on your shoulders. Listen! ‘Alligator!’”

- ・場がない単語を読み上げる。よく聞かずにあてずっぽうでカードに手を伸ばしていた児童も良く集中するようになる。
- ・読み手は単語ではなく、最初の音のみを発音する。児童はその音で始まる単語を発音できないと取れない。難易度が上がり、緊張感も増すが、1回の読み上げに対して4通りの答えがあるので、反応の速い児童のみでなく、他の多くの子どもにもチャンスが訪れる。

例 指導者：“Put your hands on your head. Listen! ‘b!’”

児童 A：“Bird!”

児童 B：“Bed!”

② Head Band Game

3～8人のグループに分かれ、代表の児童が Head Band (はちまきなどで良い) をつける。正面の額部分にフォニックスカルタのカードを1枚、イラスト面を前にして差し込む。自分以外のグループ全員に絵が見えている状態である。Head Band をまいている児童は、メンバーのヒントをもとに、自分のカードの単語を当てる。答えられたら交代し、全員が終わったグループが勝ち。または、答える児童を固定し、制限時間内で何個答えられるかを競ってもよい。その時の言語材料に応じて、使う表現を様々なものに設定できる。

会話例 Head Band の児童(S1)：“What color is this?”

メンバー (Ss)：“It’s blue. You can fly!”

S1: Is it a bird?

Ss: Yes, it is!

③ フォニックスライティング

全体を4つ程度のグループに分け、ボードの前に1列ずつ並ばせる。列の最初の児童がマーカー (チョーク) を持ち、指導者が発音した音を大文字・小文字の両方またはいずれかで書き取る。書いたら次の児童にリレー方式でマーカーを手渡す。最初は”b”, ”d”などの1つずつの音を書き取らせ、慣れてきたら”b-e-d”などのCVC words や”p-i-n-k”などの4文字以上の単語にも挑戦させる。b/v, l/r, a/u など、間違いやすいものに特に焦点を当てると「聞く、話す、読む、書く」力を総合的に高められる。

2.4 実践後

(表 1) に示したように、9 1 時間目からはほとんどすべての活動に「読む」が加わる。以下に例を示す。

- ・フラッシュカードのスペルから新出語の発音を予想する
- ・歌詞を読みながら歌う
- ・既習の単語、フレーズを読む
- ・Visual Aids、文字を用いながら、新出のフレーズ、構文を練習する
- ・スキット（寸劇）のセリフを読みながら演じる
- ・単語の意味を辞書で調べる
- ・語句を並べ替えて正しい文を作る

これらの活動に、児童たちは無理なく自然に取り組んでいる。それまでに行ってきた活動が土台となっているため、やり方を改めて示さなくても読むためのスキルが自然と身に付き始めているからである。もちろん初めから完璧に読めるわけではないが、ミスをしながらか果敢に読もうとする。学習者の中で、文字を目で追うことと、それを発音することが同時に起こっているのだ。また、読んだものを音声化できた時点で、訳さずに理解できる場合がほとんどである。

3. 考察

(表 2) のうち、(表 1) の「④Phonics フォニックス」に当たる活動は「フォニックスカルタ」(所要時間 10 分) と「フォニックス」(所要時間 5 分) である。今回の実践では、本時に限らず他のレッスンでも、45 分のレッスンのうち全体のおおむね 3 分の 1 程度の時間をフォニックス活動に充てた。また、フォニックス活動とまではいかないが、他の活動の中でも常に正しい発音を意識させ、その根拠を文字で示した。例えば、swim という単語を導入する際、すでにカタカナの「スイム」という音で覚えてしまっている学習者には、発音の違いを「スイムではなく /s/、/w/、/i/、/m/ がなめらかにつながった音である」ことをスペルと共に示した。こうした取り組みを積み重ねた結果、読む力となって児童たちに自然に備わったのではないだろうか。発音指導をおろそかにしないことがまずは大切で、その上でフォニックス活動を楽しく繰り返すことが必要なのではないか。

本稿では英語教室での実践について述べてきた。同様の実践は小学校でも可能なのだろうか。児童の人数や使用できる教材、指導内容など制約は少なからずあるだろう。しかし、児童の性格や学力、日常を良く知る教師が、子どもたちがいかにも喜びそうな「楽しい」活動を良きタイミングで作り上げることができるのは利点である。

一方で、読む力をつけさせるための発音指導がどこまで可能かという問題は大きい。

担任教師の英語力向上、専任の英語科教諭や外国語指導助手の充実を含む、「指導力」の養成は必須である。

4. 結論

小学生に読み方を教える前提として、発音指導の充実が重要である。その上でフォニックス活動を長期的に繰り返すことで、児童は自然に読めるようになっていく。そのためには、活動そのものが楽しく、飽きさせない内容である必要がある。

本実践では、言語材料そのものも、段階的に量を増やしながら常に復習、強化を行い、やり方に変化を持たせて少しずつ複雑化させた。それにより、児童が既習事項を使用し続けながら、新しい項目を学ぶ際の理解の道具として活用する習慣が定着した。安易に日本語に訳して教えず、教室内の発話をすべて英語で行う環境を整えたことも少なからず作用したに違いない。しかしながら実践の具体的評価方法は確立されておらず、指導者の主観的評価にとどまってしまった。今後の改善点である。

参考文献

- 近江誠. 1996. 『英語コミュニケーションの理論と実際—スピーチ学からの提言』 研究社出版, 東京.
- 仲田利律子. 1993. 『こうして教える子どもの英語—話せる英語の指導』 株式会社アブリコット, 東京.
- Schwermer, K., et al. 2012. *Oxford Phonics World Level 1 Student Book with Multi ROM*, Oxford University Press (Japan) Ltd, Tokyo
- Schwermer, K., et al. 2012. *Oxford Phonics World Level 2 Student Book with Multi ROM*, Oxford University Press (Japan) Ltd, Tokyo
- Nakata, R., et al. 2017. *Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Student Book with Audio CD Pack*, Oxford University Press (Japan) Ltd, Tokyo
- Nakata, R., et al. 2017. *Oxford Let's Go (4th Edition) Level 1 Teacher Cards*, Oxford University Press (Japan) Ltd, Tokyo
- Nakata, R., et al. 2017. *Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Student Book with Audio CD Pack*, Oxford University Press (Japan) Ltd, Tokyo
- Nakata, R., et al. 2017. *Oxford Let's Go (4th Edition) Level 2 Teacher Cards*, Oxford University Press (Japan) Ltd, Tokyo